

## 図書館の こんなこと知らなかった ⑦

2002年度ブラジルポルトガル語学専攻大学院修了 福森 雅史

みなさんは、どのようにして自分の欲しい本を探していますか？ おそらくOPAC（=Online Public Access Catalogue）と呼ばれるパソコンの検索画面に、書名・著書名・出版年・発行所などのデータを入力することで検索しているのではないのでしょうか。このように、みなさんがパソコンを使って蔵書検索できるようにデータを入力するのが、私の図書館での業務です。

図書館で働くまでは、単に本学図書館のコンピュータにデータ入力すればよい、つまり本学図書館だけに関わるシステムだと考えていました。しかしながら、実際は他の多くの図書館との連携によって成り立っているシステムであることがわかりました。国立情報学研究所（国情）という機関が全国の大学図書館が所蔵する本や雑誌の総合目録データベースを持っているのですが、ある本のデータを本学図書館のコンピュータに入力する場合、この国情のデータベースにあるデータを活用していたのです。勿論、一方的に活用するだけではありません。この国情のデータベースに本のデータがない場合には、本学図書館でそのデータを作成して国情に登録するのです。このように、この国情のデータベースは多くの図書館がデータを持ち寄ることで作成されたものなのです。

みなさんも、今度、図書館でOPACを利用される時には、この本のデータは他の図書館との連携によって出来上がったものなんだということをちょっと思い出して下さい。

## ドイツ文学わき道散歩(12)

「なじかは知らねど心わびて／昔のつたえはそぞろ身にしむ」。ハインリヒ・ハイネ作『ローレライ』は、ライン川のローレライ伝説をうたった詩である。夕暮れのライン川、巖頭に立ち髪を梳りながら歌声で舟人を惑わす乙女。美しい調べは、近藤朔風の名訳によって、我々にも馴染み深い。この詩でロマン派抒情詩人として知られるハイネには、もうひとつ重要な顔がある。「ユダヤ人」「革命詩人」としてのハイネである。『ローレライ』が収録されている詩集『歌の本』を上梓する前々年、ハイネは改宗し名を改めた。彼がその名を「ハリー」から「ハインリヒ」に変えた理由が、当時のドイツ社会の底にあった根深いユダヤ人問題であったことは言うまでもないが、改名むなく、結局のところ詩人は封建的な祖国を捨て、フランスへ亡命した。ナチスが台頭する実に100年も前の話である。晩年を暮らしたパリで「惨めな祖国ドイツ」を憂い、諷刺した『ドイツ・冬物語』は、革命詩人ハイネの代表作とも言える作品で、詩人の祖国への想いが溢れている。

ところでハイネが新教に改宗する前年の1824年、当時75歳だった憧れの巨匠ゲーテと会い、以来、若い詩人はそれまでのゲーテ信奉をやめて、この老作家に対し反発すら覚えている。現在でもなお「ドイツ文学の太陽」と称えられるゲーテは、よほど強烈な引力と斥力を持つのであろう。光の強いところ、影も濃いものである。しかし、この「太陽」と友情で結ばれた作家がいて、二人の親交なくしては生まれなかった名作があることもまた事実。息子の頭上に置かれたリンゴを射抜く『ヴィルヘルム・テル』を書いた劇作家、シラーが没して今年でちょうど200年なのだが、これはまた別のお話。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり